

(8) 巡礼第4日、メリデ から  アルスアまで 13.6キロ

メリデの宿 El Molino の家族と同じ“まかない食”をワインで乾杯。お母さんが作ってくれた野菜スープ、ピーマンを熱いオリーブオイルで揚げて塩を振りかけただけのピミエントス・フリートス。娘婿が陽気に鼻歌まじりで運んでくる。(写真右) うまーい!と思った直後、・・・気を失っていた。ほんの1~2分だったらしい。小野がペーパータオルで口元をガサガサ拭いてくれたので気がついた。皆ビックリ顔。宿の家族も心配顔。自分自身が唾然。胃がムカムカして気分が悪い、悪寒も。石川が携帯カイロを、竹内が胃腸薬をくれた。「疲れたと思う、一晩寝れば治る」と自分に言い聞かせるように言って眠った。目を覚ますと小野が夜食にメロンを切って持ってきてくれた。洗濯物は竹内が取込んでくれていた。この調子だと明日は歩けないかも、、、皆に迷惑はかけられない、、、でも歩きたい。主にお任せし、朝になってから判断しよう。



10月24日(水) 巡礼第4日、小雨。皆が心配して「今日は荷物と一緒にタクシーで行け」「その前に医者に診てもらおう。保険も掛けていることだし」と石川。昨夜、皆で相談したらしく、お父さんが病院へ連れて行ってくれる手筈になっていた。「一晩寝て気分がよくなった、大丈夫。心配かけてゴメン。お父さん、グラシアス」レチェ・カリエンテ=温かいミルクを作ってくれた。カウンター席では登校前の孫が竹内にスペイン語で数の数え方を教えている。あたたかい家族、そして仲間から心からの感謝! (El Molinoのお父さんと)



9:00、小雨の中を少し遅めの出発。ポンチョと泥よけ牛糞よけのためにスパッツを着けて、巡礼道に立つ十字架の前で朝の祈り。巡礼四日目だ、皆の顔に疲労が見える。昨日よりもっと上り下りが多い道、しかし距離はたったの13.6キロ、距離の短いことが皆を元気付ける。町を出ると間もなく山越えの道。竹内が先頭に立つ。昨日もそうだったが、上りになったとたん石川がハァー、ハァーを始め、歩みが遅くなる。後ろから様子を窺いながら続く。その後を小野が気遣ってくれている。「ハァーッ、ハァーッ、心臓がパクパクすんなぁー」呼吸を整えながら「2年ほど前、医者から心弁がおかしいと言われたけど、その後は何でもなかった」石川の言葉にドキッ!「おいおい、大丈夫かよ、そんな話、初めから知ってれば巡礼なんか・・・ちょっと休憩!」モチーラを担いでなくて本当によかったと思う。

暫らくして雨が止んだ。背の高いユーカリのうっそうとした森、樟脳のような香が漂う中、汗ぐっしよりの雨装備を脱ぎ去ると気持ちがいい。もうすぐ5キロ地点、ボエンテ村のバルがある筈だ。国道に出た。国道の向う側に古い教会。猛スピードで走り抜ける車の合間を横切って、誰もいない教会の裏口から入って、小さな古い机の上のセージョを勝手に押した。国道沿いのバルで小休止。一欠けのチョコレートとカフェ・コン・レチェが美味しい。胃の具合も悪くない。

気を良くして緩やかな下り道へ。前方からゆっくり上ってくる黒服にローマンカラーの80歳位のパドレと出会う。聖書に出てくる“エマオへの道”が思い浮んだ。すかさず竹内が例のスペイン語で書いた紙を見せる。**(写真下)** わけを理解したパドレはポケットから小さな祈祷書を取り出して祝福の祈り。祈りを終えるとパドレは大きく手を広げて一人ひとりをハグ。何故か胸が熱くなった。先ほどの教会の主任司祭だった。



ボエンテ村のバルで一緒だったドイツの高校女教師4人組に追着き追越す。丘の上から遠く向うの丘に町が見え、丘に上る赤土の坂が長く続いている。その坂を上りきるとアルスアの町だ。今日の宿、5階建ての Pension Rua は町の入口左側にあった。

2階受付のセニョリータが「男性の巡礼者に限り洗濯を無料にしますよ」。この2日間、小雨続きで生乾きだった物もまとめて大きな籠に四人が遠慮なく出す。笑って受けてくれた。町なかのレストランで昼食、女教師4人組が窓の外を手を振って通り過ぎた。また雨が降り出したようだ。宿に戻って洗濯場の乾燥機から熱く乾いた洗濯物を自分達で取り出していると、若い支配人がやって来て「セニョール、2005年にもここに宿泊されたそうですね」と握手。「何かあればご遠慮なくどうぞ」、営業用の挨拶なのに何だかちょっと嬉しい気分。(つづく)